

高品質良食味米の生産は健苗育成から！

1. 播種準備

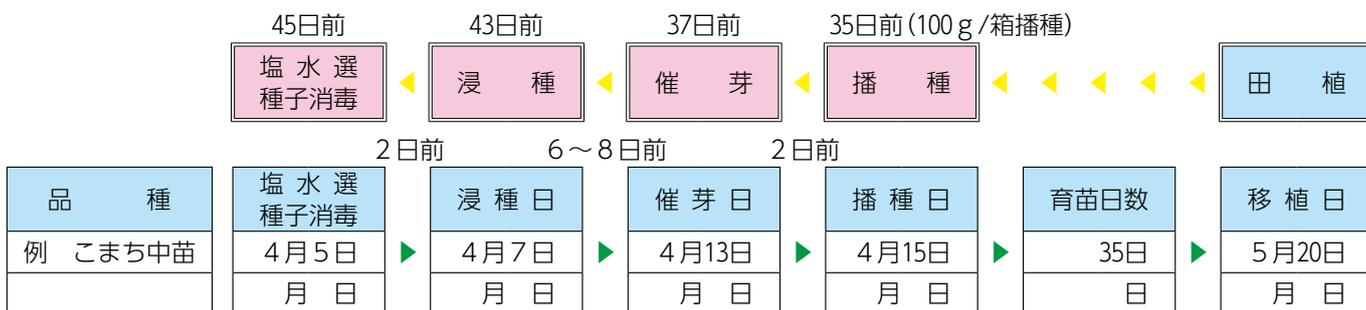
- 田植え予定日、栽植密度、苗の種類からさかのぼって播種量、播種日を決定します。
- 水温の低い時期の作業は、出芽ムラを助長するほか、播種日も早まって老化苗の原因ともなるので注意してください。

育苗日数の目安

播種量(乾籾)	100g/箱	180g/箱
育苗日数	35日	25日
目標葉数	3.5葉	2.5葉
目標草丈	13~15cm	10~13cm
10a当たり箱数	27箱	19箱

※箱数は70株/坪植えの目安

●育苗計画(中苗育苗の例)



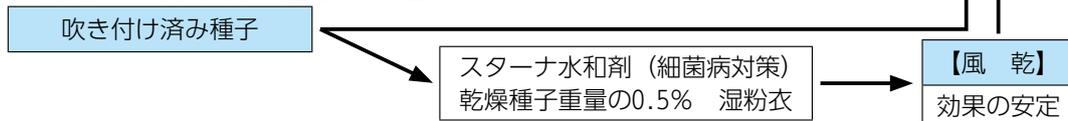
2. 種子消毒の手順

①無消毒種子の場合(※採種は産種子は、比重選をしているので塩水選の必要ありません)



※薬液は10~15℃確保

②消毒剤吹き付け済み種子の場合



3. 浸種と催芽のポイント

①浸種の水温・水量に注意を

- 種子消毒・浸種は屋内で行い、お湯で水温が15℃になるように調整します。水温が10~15℃を確保できるように、消毒・浸種の開始は早くとも4月上旬からとします。
- 種子籾を籾袋に入れる際は、一袋当たり4~5kgを目処とし、浸種水温は10~15℃、浸種水量は種子1kgに水3.5ℓ(50kgあたり175ℓ)となるように努めます(水温が低いと発芽ムラや種子消毒の効果低下を生じます)。
- 複数の品種、消毒方法の異なる種子を同じ容器で浸種・催芽しないでください。

②水の交換は適切に

- 浸種期間は浸種水温10℃で6日間程度とし、種子消毒剤の安定した薬効を確保するため水交換は2~3回とします。浸種開始後から2日間は種子消毒の効果をもとめ、水の交換をしません。
- 浸種終了の目安は、籾殻を透かして胚が白く見えるようになる頃です。

③催芽の前には必ず湯通し

- 催芽は芽の長さを揃えるために必要な作業です。袋内部の種子まで均一な温度になるよう、36~40℃の温水で必ず湯通しを行います。催芽温度は30~32℃で、芽の長さはハト胸程度(催芽長1mm)とします。

